



〒680-0941 鳥取市湖山町北5丁目201 【TEL】0857-28-2321（代表）【FAX】0857-28-8513
【URL】<http://www.torikyo.ed.jp/kyoiku-c/> 【e-mail】kyoikucenter@pref.tottori.lg.jp

ミドルリーダーとしての期待に応えるために！～基本研修（中堅研・16年目研）課題研究より～

本年度から「教員としての資質の向上に関する指標」を踏まえ、11年目以降を充実期「第3ステージ」として、ミドルリーダーに必要な力量形成をめざした中堅教諭等資質向上研修及び16年目研修を実施しています。中堅研では「学校組織の活性化」を、16年目研では「学校運営への参画」をテーマに各校で年間を通じた課題研究に取り組んでいます。研修対象者の実践例の一部を紹介します。

【中堅研】高等学校

「教員間の協働を意識した学年経営のあり方 ～新しい取組から職員間連携のあり方を探る～」

学年主任として、チームで協働することで教員間の風通しを意識した学年経営に努めました。キャリア教育に着目し、事例検討会や職場体験の振り返りと次年度への提言、生徒の自己肯定感とコミュニケーション力の伸長をねらいとしたLHRを計画・実施しました。また、生徒・担任・キャリア形成部員の三者で面談を行うことで、生徒の情報収集や進路意識の高揚に有効な取組を行うことができました。

【中堅研】特別支援学校

「センター的機能の充実～チーム活動の中心として～」

視覚障がい特別支援学校のセンター的機能の充実に向けて、広報啓発チームを中心とした取組を行いました。市町村が主催するイベントに参加要請があり、ICT機器や視覚支援機器などの展示コーナーを開設し、理解啓発を図りました。また、学校公開では、地域の方へフロアバレーやゴールボール等の体験をとおして、視覚障がいスポーツの魅力を伝えることができました。

【16年目研】小学校

「組織の中核としてのチームマネジメントについて」

組織の中核を担う立場として、協働的職員集団づくりと学校教育目標の具現化をめざしたチームマネジメントに取り組みました。研究主任として、授業研究会の事前研究や教材研究で、若手教員の相談役になるとともに、積極的に学年間の連絡調整を図ることで、組織的な研究体制づくりに努めました。

【16年目研】中学校

「『学力向上』と『生活力向上』を関連させた取り組み」

地域の良さや特性を生かした学習活動の推進や、将来地域で活躍し、地域を活性化する生徒の育成をめざした取組を行いました。今年度は学力向上推進部と生活向上推進部に所属し、LD等専門員を招いての校内研修会やボランティア活動について、地域や関係機関と連携を図りながら活動を行い、校内での情報発信に努めました。

シリーズ ICT活用に向けて④

自信をもって活用を！ ＜ICT活用指導力の発揮を！＞

毎年行われている「学校における教育の情報化の実態等に関する調査」において、鳥取県教員の「児童・生徒のICT活用を指導する能力」に対する肯定的回答の割合が低く、教員のICT活用指導力の向上が本県の課題の一つとなっています。鳥取県教育センターでは初任者研修や専門研修の中で、ICTを活用した授業づくり等に関する講座を設け、指導力向上を図る研修を実施してきました。また、これらの講座の受講者には、ICTの積極的活用と校内への還元を進めていただくための「受講修了証」を発行する等の取組を行ってきました。本年度実施した専門研修「情報活用能力を育てる授業づくり～児童・生徒によるICT活用～」では、講師の稲垣忠教授（東北学院大学）が、児童・生徒のICT活用場面について次のように示されました。

【収集】

- ・カメラで活動を撮る
- ・Webで調べる
- ・PCでメモをとる
- ・アンケートの実施

情報の質・量の
充実

【編集】

- ・デジタルで編集
- ・試行錯誤・映像
- ・グラフや表にして分析

分析・表現の
ツール

【発信】

- ・拡大して見せる
- ・WebやSNSで発信する
- ・撮影して振り返る

つながる・
ふりかえる

これは、探究学習の場における学びの足跡の蓄積（ポートフォリオ）と共有・協働（コラボレーション）の手段としてICT活用が有効であること示すものですが、「Webを活用した調べ学習」「生徒の考えや作品の拡大提示」等、これまで当たり前のように実施していることも多いと思います。ICTの活用は決して特別なことではなく、日々の実践において、「ICT活用指導力」を十分に発揮していると言えるのではないのでしょうか。自信をもって、ICT活用を進めていきましょう。

今年度、島根大学との共同研究として、2年目と16年目の教諭を対象に「鳥取県公立学校教員の資質向上に係る意識調査」を実施し、調査結果の分析を行いました。島根大学の深見准教授の調査報告を踏まえ、本センターでも分析結果をまとめてみましたので、一部ですが紹介します。調査は、『「指標」に関すること』や『「学び続ける教師像」に関すること』など、3部からなります。今回は、『「指標」に関する意識のうち、「学習指導（授業力）」に関する意識について紹介します。

【教職を担うにあたり必要となる『素養』について】

「指標」が示す『素養』についてもっとも大切にしているものを聞いたところ、右図のとおり、2年目は「理解力・教育的愛情」と回答する割合の高さが顕著であった。子どもとの距離感が近いこと、子どもとの関係性を重視している2年目の特徴が窺える。2年目・16年目ともに大切にしているものの傾向は共通していたが、16年目には「創造力・対応能力」と回答する者が多く見られたのが特徴的であった。16年目は、校内における分掌や役割が増加し、様々な対応が求められている様子が窺える。

【調査対象】

2年目：122名 16年目：83名

《素養》について集計	2年目	16年目
①理解力、教育的愛情	54.1%	45.7%
②専門的知識・技能・指導力	22.9%	24.1%
③創造力、対応能力	8.2%	16.8%
④自覚、協調性、倫理観	8.2%	7.2%
⑤教養、人権意識	6.5%	6.2%

【学習指導（授業力）について】

『学習指導（授業力）』について大切と思うものを聞いたところ、2年目は「授業を通して学び合い、高め合う学習集団づくり」と回答する割合の高さが顕著であった。また、2年目・16年目ともに「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた指導法の工夫」を大切と回答する割合が高かった。これらの項目はいずれも、大切と考えている一方で、課題としても捉えていることが調査から分かった。これらを課題と捉えている理由として、16年目は「学習の質を高めることが難しい」「教材研究の時間がない」と回答する割合が高かった。このことから、質の高い授業づくりをめざしている一方で時間的な余裕がない16年目の状況を窺い知ることができる。一方2年目は、「適切な指導方法が分からない」「指導技術が未熟である」と回答する割合が高かった。経験年数が浅いため自信がもてていない状況の裏返しと考えることができる。また、これらの課題を解決するために有効と思うものを聞いたところ、2年目は「先輩からアドバイスをもらうこと」と回答する割合が高く、先輩からの実践的・即効的なアドバイスを求めている2年目の実態を窺い知ることができた。一方16年目は「校内研修を充実させる」「校内体制を見直す」等の回答が多かった。このことから、16年目は校内研修を通じて協働的に学ぶことへの意欲の高さや、そのための校内体制整備の必要性について考えていることが窺える。

【教師として成長していくために】

その他、教師として成長するために大切にしていることを聞いたところ、2年目は「先輩からの指導・助言」と回答する割合が高く、まわりの先輩に支えられながら成長していく2年目の実態が窺えるものであった。また、2年目・16年目ともに「失敗からの学び」や「日々の授業」と回答する割合が高かった。

日々の授業や失敗からいかに学ぶかの視点をもつことは、教師としての成長につながります。昨今の教師教育研究においては、「教師のリフレクション」が大きなテーマとなっています。2年目は「先輩からのアドバイス」を、16年目は「協働的に学ぶこと」をそれぞれ大切に考えている中、「日々のリフレクション」を通じて若手もベテランもともに学び合い成長し合える「メンターチーム」のようなしくみづくり、学校体制として機能させていくことが、今後一層求められるのではないかと思います。

しおりのことば

私たち教育センターは、近隣にある幼保連携型認定こども園「ひかりこども園」の子どもたちから、毎年、心のこもったメッセージをいただいている。そして、いつも元気ももらっている。そんなつながりもあって、昨年4月、小規模保育施設として新たに竣工した「ひかりのこ保育園」の記念式典に招いていただいた。

日頃の感謝の思いとともに参列させていただいた式典の当日は、私にとって予想もしていなかった嬉しい偶然の再会の場となった。なんと、保育園のスタッフのうちの3名は、いずれも私の教え子で、一人は、中学校で初めて担任した生徒だった。「ひかり幼稚園」の園長先生も、以前お世話になった保護者だったこともあって、式典後の茶話会は、同窓会・保護者会のような、まるでタイムスリップしたかのような不思議な空間だった。

その日の帰り際、式典の記念として一葉のしおりをいただいた。そのしおりには、淡いピンクの桜の花びらとともに、「ひかりのことば あゆみなさい」という言葉が添えられていた。「光の子として歩む」って？ その言葉が妙に心に残った私は、その意味を自分なりにかみしめてみることにした。聖書や宗教について全くの素人である私の解釈は、もしかしたら、的外れも甚だしいものなのかもしれないけれど…。

この言葉は「人に喜びや希望を与えながら生きる、そんな生き方をしなさい」という意味で、「人を幸せにするためには、まずは自分自身が輝いていないといけないよ」というメッセージなのではないだろうか。言い換えれば、「自ら光り輝くことを通して、他者に光を与える存在となって生きていきなさい」という、人としてあるべき姿を象徴的に伝えている言葉に違いない。

そう考えると、自分の胸の中にまた新たな思いが生まれてくる。果たして自分はそういった存在になることができるのか、人に胸を張れる生き方ができているかなどなど。これまでの自分自身を振り返って、何となく恥ずかしいような、後ろめたいような気持ちになる自分がいることに、今更ドキッとしてしまうのだ。そして、それとは全く対照的に、これまでも増して目の前の子どもたちの姿が、夢と希望に満ちてキラキラと眩しく輝いて見えるように思えて仕方がないのだ。

所長室前の廊下には、子どもたちからのメッセージ作品が飾られている。その光に照らされて、私たちは今日も仕事をしている。

所長 小林 傳